

# イギリス英語の特徴

百 武 玉 恵 ・ 浅 田 壽 男

Characteristics of British English

Tamae Hyakutake and Hisao Asada

## はじめに

今夏鬼籍の人となった英国人の文学者ピーター・ミルワード氏は、著書『イギリス風物誌』のまえがきで、「イギリス人とは何ぞや」と自問し、「神のみぞ知る。国土と人々を創られた神の中にこそ真の知を見出せよう。これが唯一の答であり最上の答である」と述べている。自分について語るとはさように難しいと思われるが、英語学の世界では、優れた研究者に非母語話者が多く含まれることはよく知られている。つまり、研究は対象の外側からするほうが内側からでは見えないものが見えると考えられる。

本稿では、非母語話者である日本人研究者の目をとおして、イギリス英語とはどのような言語か、その諸特徴を明らかにするとともに、背景にある英国の文化・社会との関わりを俯瞰して、イギリス英語の全容を明らかにする一助としたい。

第1節は、百武が担当し、イギリス英語の発音、語彙、文法の諸特徴について、代表例を挙げながら論じる。第2節は、浅田が、かつてノッティンガム市内で暮らした日々の体験知見をもとにイギリス英語の語法について、スピーチ・レベル、社会階層、アメリカ英語化という3つの観点から論じる。

## 1. イギリス英語の発音・語彙・文法

イギリス英語を論じる手法としては、アメリカ英語との比較を通してその違いを際立たせ、特定するのが一般的である。本節でも、アメリカ英語との比較を中心にイギリス英語の特徴を概観する。

アメリカ英語が誕生するのは17世紀初頭、イギリスではエリザベス1世の時代であるが、それ以降両者の間にどんなことが起こり今日に至っているのか。Strevens (1972) は、①イギリス英語自身が時代の変遷とともに変化した、②アメリカ英語は自国の発展に伴って独自の特性を獲得した、③両者の相互作用と関係が変化した、の3点をあげている。以下では両者の違いに着目して、発音、語彙、文法の側面からイギリス英語の特徴を論じる。

### 1.1. イギリス英語の発音

英語学習者が習う発音は容認発音 (Received Pronunciation, RP) であるが、これはイギリス南西部を発祥とする発音であり、現在ではイギリス国内であればまったく地域差のない、いわゆる標準発音と呼ばれるものである。しかしながら、生得的にこのアクセントを用いるイギリス人は人口の3-5%にしか過ぎない (Trudgill and Hannah, 2017)。RPはイギリス英語の典型とは言い難いだろう。アメリカ英語と比較しても、はるかに多くの地域方言と社会方言を持つのがイギリス英語なのである。

アメリカ英語との比較において、イギリス英語に特徴的な発音として挙げられる、音節の最後に現れる /r/ を発音しない non-rhotic と呼ばれる現象や /f/, /s/, /θ/, /ð/ などの子音または母音の前に出現するアメリカ英語の /æ/ が /ɑ:/ となる現象は、イギリス全土にみられる特徴ではない。平賀 (2016) はヒューズ&トラッドギル (1984) を以下の表-1 のようにまとめ、イギリス国内の地域別の違いを示している。この表からもわかるように、音節最後の /r/ はスコットランドやアイルランドの一部に見られる現象であるし、/æ/ の発音はスコットランド、アイルランドだけでなくイングランドの一部にも見られる現象である。また、RPの /ŋ/ は形式ばらない場合全土で欠落するとされているが、これは社会階級が下がるほど顕著になり、中流中産階級以上ではRPの発音が維持されるといわれる。

表-1 イギリス英語発音の地域的特徴

音声的特徴		地域	具体例	備考
RP	方言			
/ʌ/	/ɒ/	北部、中部	bus /bɒs/, but, cud, putt	put と putt は発音上区別されない
/ɒ/	/u:/	北部 Scot. Ire.	book /bu:k/, cook, pool	pool と pull は発音上区別されない。“oo”の綴りをもつ語
/ɑ:/	/æ/	北部、中部	path /pæθ/, grass, dance /dæns/, grant	/ɑ:/ は、palm, half には用いる
		Scot. Ire.	path /pæθ/, dance, palm /pæm/, half /hæf/	/ɑ:/ を用いない
/ɪ/	/i:/	中部の南、南部	city /sɪti:/	北部方言では RP と一致する唯一の特徴
Non-rhotic	Rhotic	Scot. Ire. 南部の西	bar /bɑ:r/, bark /bɑ:rk/	Eng. Wal. の農村部労働者階級でも Rhotic
/ŋ/	欠落	全土	singing /sɪŋɪn/, walking, hunting	形式ばらないスタイルの場合
/j/	欠落	中部の南、南部の東	news /nu:z/, tune /tu:n/, view /vu:/, queue /ku:/	

北部、中部、南部はそれぞれイングランドにおける地域； Scot. = Scotland； Ire. = Ireland； Eng. = England； Wal. = Wales

(平賀, 2016:64)

音声の地域性という点では、1980年ごろから使われるようになったといわれる河口域英語 (Estuary English) を挙げなければならないだろう。発音は、ロンドンの下町労働者階級で話されるコックニーとRPの中間的な特徴をもち、milk [mɪʊk], able [aɪbʊ], water [wɔː?ə]のようになる。河口域英語は、BBC放送や王室関係者の一部にも用いられていることから、平賀 (2016) は、将来階級色の強いRPに取って代わられるかもしれないと述べている。

Algeo (2006) は、イギリス英語とアメリカ英語の最も際立った違いはイントネーションであると述べている。日本の英語学習者は、ほとんどアメリカ英語をお手本に勉強しているので、初めてイギリス英語に遭遇すると多くの人がイントネーションの違いに戸惑う。なかでも、疑問文の抑揚は学校で習うものとは少し違い、下降調で終わるのである。イギリスに滞在したことのある人は気づくと思うが、yes, noで答える疑問文であっても、ピッチは上がるが、抑揚は下がり気味になることが多い。

## 1.2. イギリス英語の語彙

イギリス英語とアメリカ英語では、イントネーションと並んで大きな違いを示すのは語彙である。語彙の違いを扱ったものとしては、シュール (1996) や仲村 (1999, 2001) などが詳細に記述している。寺澤 (2008) は、男性の称号であるMr. について、イギリスではピリオドを付けないMrが好まれることを指摘しているが、このように細かいことにこだわるのもイギリス英語の特徴と言えるかもしれない。さらに言えば、手紙の宛名にはMrよりもEsq. (=Esquire)の方が好まれるようである (e. g. John Smith, Esq.)。

語彙の違いは、多くの場合同じ概念を表すのに異なる語 (句) を用いることに起因するが、Trudgill and Hannah (2017:90-92)は、語彙の違いをもつ語を具体例とともに以下の4種類に分類している。

### (1) 異なる意味を有する語 :

homelyは、イギリス英語では*down to earth, domestic*という意味で使われるが、アメリカ英語では*ugly (of people)*という意味で使われ、前者の意味で使う場合はhomeyが使われる。

### (2) 共通の意味にそれぞれ別の意味が加わった語 :

frontier (=a wild, open space) は、イギリス英語では*border between two countries*の意味が加わる。

bathroom (=room with bath or shower and sink) は、アメリカ英語では*room with toilet only*の意味が加わる。

### (3) スタイル、含意、使用頻度が異なる語 :

autumnは、イギリス英語では一般的に使われ、文体を選ばないが、アメリカ英語では稀で、詩的またはフォーマルな場で用いる。代わりにfallを使う。

### (4) 連語や語法が異なる語 :

古い家や建物が取り壊される時、イギリス英語では*pulled down*が使われるが、アメリカ英語では*torn down*と言われる。

一方、イギリスだけで用いられ、アメリカではその用法がほとんど知られておらず別の語で対応している場合もある。

(5) イギリス英語のみ	対応するアメリカ英語
dynamo	generator
hire purchase	installment buying
nought	zero
queue	line
spanner	wrench
treacle	molasses

(Trudgill and Hannah, 2017:92)

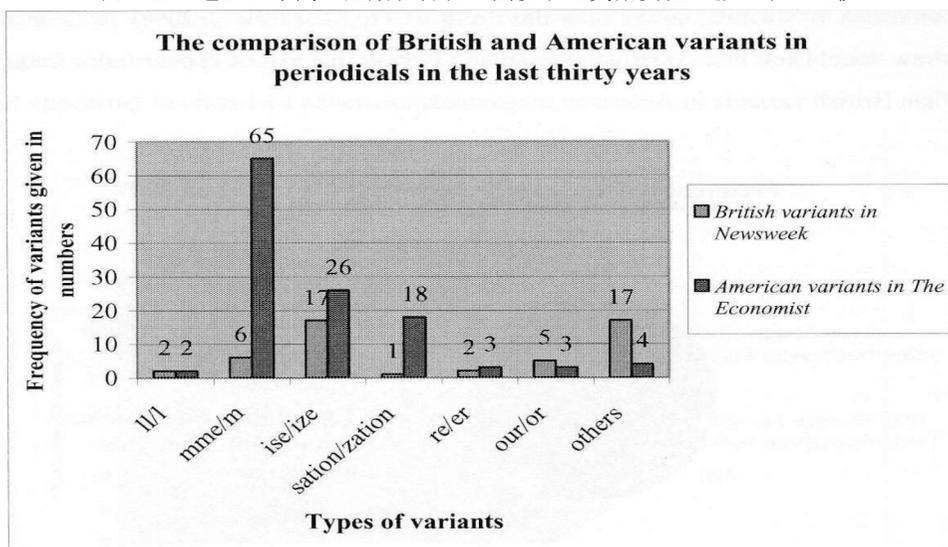
第1次世界大戦を契機にアメリカの政治的・経済的覇権は勢力を拡大し、近年ではアメリカを核とするITの影響力が世界を席卷している。言語は極めて政治的な力を有し、アメリカ英語の侵食はかつての大英帝国の勢いを凌ぎ、英語の母国であるイギリスも例外ではない。第2次世界大戦前後以降北米の英語変種からイギリス英語に移入した語には次のようなものがある。

(6) 移入された語	それ以前の語
(car) battery	accumulator
briefcase	portfolio
raincoat	mackintosh
radio	wireless
sweater	jumper
dessert	sweet
peanut	monkeynut
soft drinks	minerals

(Trudgill and Hannah, 2017:94-95)

(Pernecker, 2010) は、過去30年間の両国の定期刊行物における単語の綴りを調査した結果、アメリカ英語の綴りがイギリスの定期刊行物に出現する頻度がその逆の場合よりも高いことを発見した。表-2は、イギリスで発行されている*The Economist*で採用されているアメリカ式綴り字が、アメリカの*Newsweek*に出現するイギリス式綴り字に比して高い頻度を示すものである。特に、programmeなどにおける-mmeが-mに取って代わられる現象が顕著である。

表ー2 過去30年間の定期刊行物に出現する英語変種の綴り字の比較



(Pernecker, 2010:32)

政治的戦略の意図は別にしてアメリカ英語が頻繁に借用される理由として、Pernecker (2010) は、アメリカ英語に内在する発明力と創造力を挙げている。その特性が、単により簡単な形の語を選ぶ目的を与えていると述べている。

### 1.3. イギリス英語の文法

発音・語彙の差異とは異なり、イギリス英語とアメリカ英語の文法上の差異は比較的小さいと言える。しかしながら、その小さな違いが混乱を生むこともあり、違いの多くは両者が常に影響し合っているが故に流動的である (Algeo, 2006)。以下では、代表的な違いについて動詞、名詞(句)、前置詞を例にとって概観する。

#### 1.3.1. 動詞

アメリカ英語では、多くの不規則動詞が規則変化するようになったが、イギリス英語ではそのままである。いくつかのアメリカ英語では逆のパターンもあり、getの過去分詞gottenはイギリス英語では使われないが、アメリカ英語ではhave gottenが'own'や'possess'の意以外で用いられることはよく知られている。

(7)	イギリス英語	アメリカ英語
現在形	過去形／過去分詞形	過去形／過去分詞形
Burn	burnt	burned
Dwell	dwelt	dwelled
Dream	dreamt	dreamed
Kneel	kneelt	kneeled

(Trudgill and Hannah, 2017:61)

動詞を前置詞とともに用いる連語においても英米で異なる場合がある。

(8) イギリス英語	アメリカ英語
to battle with/against (the enemy)	to battle
to check up on	to check out
to fill in (a form)	to fill out
to prevent (something becoming...)	to prevent from
to protest at/against/over (a decision)	to protest

(Trudgill and Hannah, 2017:73)

### 1.3.2. 名詞 (句)

名詞の形態素についても、アメリカ英語はイギリス英語よりも生産的である。ひとつの語基に屈折形態素を付加することで語を増やすことができる。これは、日本人のように母語がまったく異なる英語学習者にとっては習得を比較的容易にする。また、動詞句から名詞句への変換もアメリカ英語ではゼロ派生が多く見られる。

(9) イギリス英語	アメリカ英語
undertaker; hairdresser	-cian: mortician; beautician
retired person; conscript	-ee: retiree; draftee
snack bar; shoe shop	-ery: eatery; bootery
lorry driver; gambler	-ster: teamster; gamester

(Trudgill and Hannah, 2017:74)

(10) アメリカ英語	
動詞	名詞
to cook out (-side)	a cook-out ('an outdoor barbeque')
to know how (to do something)	the know-how
to run (someone) around	the runaround
to stop over (somewhere)	a stop over
to try (someone) out	a try-out ('an audition')

(Trudgill and Hannah, 2017:74-75)

### 1.3.3. 前置詞

イギリス英語とアメリカ英語では、同じ意味を表すのに用いる前置詞に違いがある。

(11) イギリス英語	アメリカ英語
behind	in back of
out of	out
round	around
to be in a team	to be on a team
to live in a street	to live on a street
to be in a sale	to be on sale

(注：イギリス英語ではon saleはfor saleの意で用いられる)

(Trudgill and Hannah, 2017:81-82)

無生物目的語に後置する前置詞句内の同一指示代名詞itは、イギリス英語では削除されるがアメリカ英語では削除されない。

- |                                  |                                     |
|----------------------------------|-------------------------------------|
| (12) イギリス英語                      | アメリカ英語                              |
| The soup has carrots in          | The soup has carrots in it          |
| This shirt has two buttons off   | This shirt has two buttons off it   |
| I'd like toast without butter on | I'd like toast without butter on it |
- (Trudgill and Hannah, 2017:84)

## 2. イギリス英語の語法

本節ではイギリス英語の語法を取り上げて、(1)スピーチ・レベルに関わる語法、(2)社会階層を反映した語法、(3)加速するアメリカ英語化、という3つの角度から、イギリス英語の諸特徴を論じる。

### 2.1. スピーチ・レベルによって異なる感謝の言葉

すでに拙稿(2009b:20-22)でも述べたが、周知の通りcheersという言葉はイギリスに限らず、おそらくは万国共通の乾杯の音頭である。例えば*Longman Guide*にも次のような記載がある。

- (13) In both British and American English, cheers is the practically universal toast before drinking. —*Longman Guide to English Usage* (1988) [*Longman Guide*]

しかし、このcheersはイギリス英語においてのみ、お礼やお詫び、さらには別れの挨拶にも用いられる万能の表現である。

- (14) For many British speakers it is an all-purpose word used as a form of thanks, as a farewell, and even as an apology. —*ibid.*

便利この上ないが、時と場合によれば、お礼を言っているのか、別れの挨拶を言っているのか、判別がつかない。

例えば筆者がノッティンガム大学の客員研究員であった当時<sup>1</sup>、市内のArnoldという由緒ある住宅街に借りた自宅から大学まで、毎日、バスで小一時間の道のりを通ったが、バスがキャンパスに到着して下車する際、乗り合わせた学生たちが口々に運転手にcheersと礼を言っていた。その時、運転手も必ずcheersと返していたが、この運転手のcheersは、お礼(thanks)なのか、別れの挨拶(bye)なのか、判別できない。逆に言えば、このcheersは、時と場合によって、つまりコンテキスト次第で、七色に変化する意味を備えていることが面白いし、さらに言えば、語用論の観点から見ると、「謝意」と「別れの挨拶」は重なるという示唆も得られる。

Cheersはイギリス英語独特の表現であるが、さらに謝意の特別な表現として、thanksが短縮し転訛したtaがある。スピーチ・レベルの低い俗語であり、また幼い子供が使う幼児語でもあって、あえて日本語で語感を表すならば「あんがと」に相当する。日本でも下町の商売人や市場の店員が「毎度ありがとうございます」を略して「毎度ありー」と言ったり、関西でも特に大阪周辺の下町で商売人が「大きにありがとうございます」を略して「おおきにー」と言うのに似ている。

taの語源については残念ながら詳細不明で、手元のODEを見ても次のような記述があるだけだが、

## (15) ta

Exclamation (Brit.) (informal) thank you.

ORIGIN late 18th cent.: a child's word.

—*Oxford Dictionary of English* (Second ed.) 2005. [ODE]

(感嘆詞、英国のくだけた表現「ありがとう」の意。語源は18世紀後半の幼児語)

インターネット上の識者によれば、古期英語 (Old English [5世紀~1150年頃]) や中期英語 (Middle English [1150年頃~1500年頃]) の時代に、スコットランドやイングランド北部において、デンマーク語 (Danish) の謝意を表すtakから、語尾のkが脱落して出来た語だとのことである。

(16) The Danish word for Thanks is tak. In Scotland and upper England it was common to drop the k at the end because of the way words were pronounced during the time of Old English and Middle English. Hence the slang word “Ta” which should actually be pronounced “TA-k” but over time became “Ta” is really Tak meaning “Thanks.”

—*The Urban Dictionary Mug*

語源はさておき、このtaについては、ノッティンガムで暮らした日々、地元では聞く機会がなかったが、頻繁に訪れたロンドンでは、バスの運転手が運賃を払って乗車する客に向かって“Ta”と礼を言っているのを何度か聞いたことがある。

## 2.2. U (上流階級) とNon-U (非上流階級) の言葉

例えば俗語で「posh」(上品な、上流階級の) と呼ばれる特別な言葉遣いがあるが、これは「文語体/口語体」や「formal/informal」といった、いわゆる「スピーチ・レベル」の一種ではあるものの、社会階級を反映した独特の言葉遣いという点で、従来のスピーチ・レベルとは明らかに範疇を異にしている。

特に社会階級が因習化した英国では「上流階級」(upper class、以下、Uと略す) の英語と「非上流階級」(non-upper class、以下、Non-Uと略す) の英語の区別が注目され、長らく斯界で喧しく論じられた。

発端は、1956年に出版された英国女流作家Mittfordほか編集のエッセイ集『Noblesse Oblige』(貴族の義務) の巻頭を飾ったRossのエッセイ「U and non-U」であるが、Rossはこのエッセイでも、またこのエッセイの基になったRoss (1954) でも、UとNon-U (中流階級と下層階級) を区別するのは、唯一、言葉遣い (の違い) のみだと結論した。

(17) It is solely by its language that the upper class is clearly marked off from the others. —Ross (1954:113)

彼はこのような観点から、Uの言葉遣いと、それぞれに対応するNon-Uの言葉遣いを、書き言葉 (Written Language) と話し言葉 (Spoken Language) に分けて、語彙、表現、文法、発音にまたがって多数、例証し、この分野の研究の口火を切った。例えば、Uは「昼食」をlunch (古くはluncheon) と呼ぶが、Non-Uはdinnerと呼ぶ。一方、Uは「夕食」をdinnerと呼ぶが、Non-Uはevening meal と呼ぶ。[Ross (1954:136)]

この方面の研究動向や歴史はRoss (1969) に詳しいが、そもそもの議論の始まりから四半世紀を過ぎた頃、それまでの総括としてBuckle (1978) が発刊された。

このBuckle (1978) にはUとNon-Uの基本的な語彙が一覧表にまとめられている。参考までにそ

の一部を抜粋しておく。

(18) Non-U	U	
Classy	smart	洗練された、エレガントな
costly	expensive	高価な、贅沢な
dress-suit	dinner jacket	男性の礼服
expecting	pregnant	妊娠している
I couldn't say	I don't know	分かりません
jack (in cards)	knave	(トランプの) ジャック
mirror	looking-glass	鏡
pardon?	what?	(聞き返しの) すみません、何ですか
pass on	die	死ぬ
pastry	cake	ケーキ、パン菓子
perfume	scent	香水
preserve	jam	ジャム
serviette	table-napkin	ナプキン
sufficient	enough	十分な
toilet paper	lavatory paper	トイレット・ペーパー
unpleasant odour	awful smell	悪臭
wealthy	rich	金持ち
wire	telegram	電報、電信

— A Beginner's Glossary of Non-U Words and Their U Equivalents[Buckle (1978:xviii-xix)] —

ここで注目すべきは、「U対Non-U」英語の相違が、全く単純ではないことである。同様の指摘はBuckle (1978)の日本語版(小野茂[訳]1982年)にある「訳者はしがき」(p.4)にも見られるが、Uが必ずしも「気取った、上品な表現」を用いるとは限らず、むしろNon-Uの方が逆に「気取った、上品な」言葉を使う場合が少なからずある点は看過できない。上掲のBuckle (1978)の語彙対照表を見ても、大方の予想に反して、Uの方がNon-Uよりもぞんざいで不躱な言葉を用いる例がいくつも見られる。

例えば「悪臭」を、Uがawful smellと不躱に言うのに対して、Non-Uの方が遠回しにunpleasant odourと上品に言ったり、「死ぬ」をUは直接、露骨にdieと言うのに対して、Non-Uはpass onと柔らかく、婉曲法を用いる。「分かりません」と言う場合に至っては、Uが無愛想にI don't knowと言うのに対して、Non-UはI couldn't sayと假定法の婉曲用法で、やんわり遠回しに言う。「妊娠している」も同様に、Non-Uが遠まわしにexpectingと言うのに、Uはあからさまにpregnantと言う。

思えば、冒頭で触れたposh(上品な表現)も、Non-Uが用いるからposhと揶揄されるのであり、このposhというラベルはNon-Uの言葉遣いに対して与えられる標識であって、Uの言葉遣いを指すものではない。

ただ、1950年代初めにUとNon-U議論が巻き起こって以来、すでに半世紀以上が経過し、イギリスでも社会階級、あるいは階級意識そのものが時代に逆行したものになった現在、時代の流れと共にこの方面の研究ブームが去ったような感があるが、実はすでに1970年代の後半にはSutherlandのように、UとNon-Uの言葉遣いの相違を特別に議論することに対して、批判の目を向

ける識者もいた。例えば、Sutherlandは、彼独特のユーモアと風刺を込めて、次のように述べている。

- (19) ...Nancy Mitford, with all her goings on about U and non-U, fairly put the cat among the pigeons. ...—Sutherland (1978:68) (ナンシー・ミットフォードがUとNon-Uの言葉遣いについて言い出して、まるで鳩の群の中に猫を放り込んだような大騒ぎだ)
- (20) A great deal of nonsense has been written about so-called upper class speech, as if it were some sort of trap deliberately set by the socially assured to catch out the pretenders in their midst. ...—Sutherland (1979:13) (いわゆる上流階級の言葉に関して、たくさん、ばかげたことが書かれて来た。あたかも社会的に権威ある人々(上流階級の人)が、自分たちの中にいる偽の上流階級ぶった人を見つけ出すための意図的に仕掛けられた罠であるかのようだ)

Sutherland一流のユーモアたっぷりな風刺はさておき、UとNon-Uは、イギリス英語を深く理解する上で、避けては通れない側面であることに間違いはない。

### 2.3. 進むアメリカ英語化 —helloとhi—

19世紀に始まる言語地理学を持ち出すのはあまりに大げさだが、ジリエロン<sup>2</sup>の言語地理学は「文化的中心地から離れば離れるほど、古い言葉が残る」事実を明らかにして、これを「周分布の原理」と称したが、思えば誰しもが都会から地方に行った時、そこに古い風習や言葉遣いが残っていることに気づいて、はっとすることがあると思う。

筆者(浅田)は、2005年から2006年にかけてロンドンから鉄道で約2時間北上したノッティンガム市で暮らしたが、ここでは祭日は街を挙げて祝い、ハロウィーンの折も、高校生のような大人から小さな幼児(蛇足ではあるが、近所の老夫婦が幼児を、いつもbambinoと呼んでいるのに、ふとイタリア語の影響を実感したことが昨日のように思い出される)まで親に手を引かれ、近所の家々を回り、口々にTrick or treat!と大声でお菓子をねだる。我が家にも大勢の子供たちが次々に押し寄せて来て驚いた。拙稿(2009b:14-15)第2節「ハロウィーン」を参照されたい。しかし同じ頃、ロンドン周辺にいた友人知人にハロウィーンの様子を尋ねたところ、ロンドンではノッティンガムのような盛り上がりは見られなかったとのことである。

言葉の面でも、ノッティンガムで暮らしていた当時、街中で近所の顔見知りに出くわした時、家内が“Hi!”と挨拶したら、相手は“hi”とは答えなくて、いつも“Hallo!”とか“Hello!”と挨拶を返した。何度かこれを繰り返したので、ここではアメリカ英語的にhiと言わずに、helloと挨拶の方が良いと、家内に助言したことを思い出す。

このように、イギリス英語ではhiと言わずにhallo(またはhello)と挨拶することは日本でもかなり知られているが、その理由については小寺(1986:303-304)に「上品と言えないheyを連想させるからではないか」という指摘が見られる。筆者は違った意見を持っていて、すでに拙稿(2009b)の第6節「イギリス人の挨拶(1) helloとhi」の所でも詳述した通り、「heyを連想させるというより、hiがheyのように『ねえ』とか『ちょっと』といった呼びかけ語に使われるから、英国では『こんにちわ』という意の挨拶には使われない」と考えている。

いずれにしても、当時から10年余の歳月が過ぎて、イギリス英語のアメリカ英語化が一層進み、本稿執筆の時点(2017年秋)では、映画やテレビなどのメディアやネット情報を見ている、ロンドンを中心にして、特に若者の間で、挨拶のhiが違和感なく使われるようになった感がする。

ただ、ノッティンガムで暮らす友人知人（英国人）によれば、特に年輩者の間では、今も変わらずhiという挨拶は避けられていると聞き及ぶ。鉄道で僅か2時間の所ながら、ロンドンとノッティンガムの間にも、先に触れた「周辺分布の原理」が働いているようだ。

## おわりに

イギリス英語に関わる著書や研究書はあまたあるが、本稿では、それらの先行研究を踏まえて特筆すべき事柄をまとめるとともに、筆者たち自らの経験を軸にして論じた。第1節では、イギリス英語の発音、語彙、文法の諸特徴について最新の文献資料にもとづいて論じた。特に、発音と綴り字については従来の研究とは異なる切り口からの調査結果を紹介した。第2節では、イギリス英語の語法について社会言語学的見地も交えて広角的に言語を捉えて論じた。イギリス特有の階級社会で生まれた言語変異の問題や、さらには言語の背景にあるイギリスの文化や社会についても、今後、継続して精査する予定である。

### 謝辞（百武玉恵）

本稿執筆のきっかけとなったのは、北九州（市立）大学大学院研究科在籍時の研究指導教官であった恩師、浅田壽男先生のお誘いである。優秀な諸先輩方を差し置いて名前を並べるのは僭越の極みであるが、共著の機会をお与えくださった浅田先生に感謝するとともに、ここに記して厚くお礼申し上げます。

### 謝辞（浅田壽男）

本稿執筆に当たって、北九州大学在職中に、大学院のゼミで初めてお会いして以来、20年余、常に交流を絶やさず、この度には共著という形で執筆の機会を与えてくださった百武玉恵・九州ルーテル学院大学准教授に、まず心から感謝いたします。また学外者である筆者にも執筆をお認めくださいました九州ルーテル学院大学ならびに関係各位に衷心よりお礼を申し上げます。なお定年退職後の現在も在職当時と同様に利用させていただいている関西学院大学図書館と、現在、非常勤講師として勤務する西南女学院大学の附属図書館には、文献資料の収集に際して多大なご援助をいただいた。ここに記して、両図書館ならびに関係各位に篤くお礼申し上げます。

## 注

- 1 筆者（浅田）は、2005年9月20日から2006年3月23日まで当時の勤務先・関西学院大学の留学制度の支援を受けて英国ノッティンガム大学英語学部（School of English Studies, The University of Nottingham, University Park, Nottingham NG7 2RD, UK）に客員研究員として英国中東部のノッティンガム市で暮らす機会を得た。この時の体験知見を「イギリス英語の背景」と題した一連の論考〔浅田（2009a～2010）〕にまとめているので、ご参照いただければ幸いです。
- 2 Jules Gillieron（1854-1926）は、スイス生まれの言語学者で、言語地理学の基礎を築いた1人。

## 参考文献

## (第1節)

- Algeo, John. 2006. *British or American English?* Cambridge: CUP.
- 平賀正子. 2016. 『ベーシック 新しい英語学概論』東京：ひつじ書房.
- ヒューズ, A.・P. トラッドギル. 1984. 『イギリス英語のアクセントと方言』(鳥居次好・渡辺時夫(訳) *English Accent and Dialects*) 東京：研究社.
- ミルワード, P. 1983. 『イギリス風物誌』(スタンダード英語講座 11) 東京：大修館書店.
- 仲村芳信. 1999. 「アメリカ英語とイギリス英語—ここが違う」『沖縄大学紀要』第16号, pp. 37-62.
- 仲村芳信. 2001. 「アメリカ英語とイギリス英語—ここが違う (Part 2)」『沖縄大学法経学部紀要』創刊号, pp. 87-110.
- Pernecker, Judit. 2010. *British and American English*. Saarbrücken: VDM Verlag Dr. Müller.
- シュール, N. W. 1996. 『イギリス/アメリカ英語対照辞典』(豊田昌倫・小黒昌一・貝瀬千章・吉田幸子(訳) *British English, A to Zed*) 東京：研究社.
- Strevens, Peter. 1972. *British and American English*. London: Collier-Macmillan.
- 寺澤盾. 2008. 『英語の歴史』東京：中央公論新社.
- Trudgill, Peter and Jean Hannah. 2017. *International English* (sixth edition). Oxon: Routledge.

## (第2節)

- 浅田壽男. 2009a. 「イギリス英語の背景—イギリス人の暮らし—」『言語理論の展開と応用—西川盛雄教授退官記念論文・随想集—』pp. 5-18. 東京：英宝社.
- 浅田壽男. 2009b. 「イギリス英語の背景—イギリス人の暮らし (その2) —」『言語と文化』第12号. pp. 11-23. 関西学院大学：言語教育研究センター.
- 浅田壽男. 2009c. 「イギリス英語の背景—イギリス人の暮らし (その3) —」『社会学部紀要』第117号. (真鍋一史教授退職記念号). pp. 99-112. 関西学院大学：社会学部.
- 浅田壽男. 2010. 「イギリス英語の背景—イギリス人の暮らし (その4) —」『言語と文化』第13号. pp. 19-35. 関西学院大学：言語教育研究センター.
- Buckle, Richard. 1978. *U and Non-U Revisited*. London: Debrett's Peerage Ltd. (小野茂(訳) 1982年『英国社会階層と言語表現 UとノンU—再考—』東京：秀文インターナショナル)
- 小寺茂明. 1986. 『英語教育と英語学研究』京都：山口書店.
- Ross, Alan S.C. 1954. "Linguistic Class-Indicators in Present-Day English." *Neuphilologische Mitteilungen* 55, pp. 113-149, Helsinki.
- Ross, Alan S.C., Nancy Mitford, *et al.* (eds.). 1956. *Noblesse Oblige*. London: Hamish Hamilton.
- Ross, Alan S.C. (ed.) 1969. *What Are U?* London: Andre Deutsch Ltd.
- Sutherland, Douglas. 1978. *The English Gentleman*. London: Debrett's Peerage Ltd.
- Sutherland, Douglas. 1979. *The English Gentleman's Child*. London: Debrett's Peerage Ltd.
- [インターネットWebサイト]  
*The Urban Dictionary Mug*  
<http://www.urbandictionary.com/define.php?term=TA>  
 [2017年9月17日参照]